

---

7/7

麻生柚葉

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

7 / 7

### 【Nコード】

N 6 1 0 4 M

### 【作者名】

麻生柚葉

### 【あらすじ】

七夕の日の君に捧ぐ。

それは七夕の日に起こったお話。

お星様から星の子に送られた一つの出会い。

そして、新たに出会いを願うお星様のキセキ

お 01・ 夜空に浮かぶガとアルタイルへ（前書き）

この創作はサイトの七夕記念で創った物です。

## お 01・ 夜空に浮かぶガとアルタイルへ

それはとある七夕の日

夜空には雲一つ無く、零れ落ちそうなほど沢山の星が輝いていました。

きつと織り姫と彦星も年に一度の逢瀬を楽しんでいることでしょう。

そんな星空の下、星見を楽しんでいる一人の精霊が居ました。

名前はノーノ。

小さくて可愛い夜羽の子。

「今日は星が一際綺麗でしね。」

普段は星なんて見るのを忘れてしまうノーノですが、今日は特別。少しでも星に近づけるようにこの辺りで一番背の高い丘の上、ノーノは寝そべり星を見上げています。

「手を伸ばしゅと星が掴めそうでし…」

そう錯覚してしまいそうになるくらいに輝く星は近くに見えて…  
近くに…

「って、本当に近づいて来るでし！」

思わず飛び起きて確認して見ても、目を擦ってみても、間違い無く星が一つノーノの方に落ちて来るではないですか。

ノーノは慌てて辺りをオロオロと動きまわってみますが、そんな事お構いなしに星はどんどん近づいて来ます。

辺りにはクッションになりそうな物は無く、このままでは星は地面に落ちて砕けてしまうかもしれません。

「ぴやあああ！」

叫んでみても状況は変わりません。  
考える事ほんの数秒、潔く諦めてノーノは星を受け止め事にしました。

ノーノの小さな手では心もとないですが、精一杯広げて受け止める体勢になりました。

運動神経には自信があるし、体も頑丈な自信もあり。

だから、大丈夫。

きつとあんなに高い所から落っこちて来るんだから、星は怖い思いをしているに違いありません。

それならば、着地の時だけでも怖くないようにしてあげないと。

そんな思いを胸に、星を待ち構えるノーノ

星はどんどん近づいて来ます。

でもそれは思っていたよりもゆっくりで。

キラリと瞬きながらノーノの手のひらに収まりました。

「お星しゃま捕まえちゃったでし……」

キラキラ輝く星は夜空に浮かぶ星以上に綺麗で、とても不思議な力を感じました。

## 星 02・私の願い、叶えてくれますか？

キラキラ光る落ちてきた星。

それは何処か温かみがあり、しかしその中に冷たさも存在しているようでした。

不規則に輝く星はきつとどんな宝石よりも美しい。

ノーノは目を奪われてしまいます。

「貴方の願いは何ですか？」

「！」

何の前触れもなく、いきなり背後からかけられた声にノーノは驚きのあまり飛び上がりました。

勢い良く振り返ると、そこには一人の少女の姿。

いくら星に気を取られていたとしても声をかけられるまで気がつくことが出来ませんでした、気配を感じませんでした。

戦闘にも特化している夜羽の精霊が、気付く事が出来ない存在にノーノは目を丸くしました。

しかし少女はそれに気が付いていると言うのに、ただ、微笑むだけ。短い髪が風に揺れ、その色合いは今にも夜に溶けて消えてしまいうです。

「あなた・・・誰でしか？」

「私は貴方の持つナガレボシを使って貴方の願いを叶える者。

ナガレボシは願い事を叶えてくれる・・・そんなお話を知っているでしょう？」

私はナガレボシ。貴方の願いを叶える事が出来る者。」

ナガレボシのお話。

ナガレボシに三回願いを唱えることが出来ると願いが叶うらしい。  
ナガレボシを拾う事が出来たのなら、星の子に願いを叶えて貰えるらしい。

誰でも知っている、御伽話。

お話の中だけの存在だと思っていたそれが今、ノーノの目の前に居た。

不思議と嘘だとは思いませんでした。

何よりノーノの手の中には落ちてきたナガレボシが  
そして彼女の存在が、出す雰囲気は嘘だとは思えませんでした。

「ナガレボシ・・・星の子・・・」

「そうです。私は・・・星の子

だから、私は貴方の願いを叶えにきました。」

手にしたナガレボシが肯定するように熱く、熱を帯びた気がしました。

「貴方の願いは・・・」

「待ってください！あなたは誰ですか？」

願いを聞きだす為、もう一度問いかけようとすると遮られてしまいました。

それは一度答えがはずなのに。

少女は頭にハテナを浮かべます。

普通の人ならば、ナガレボシを手にした時点で理解します。

それで理解できなくても、音も無く現れる少女を見てその存在で悟ります。

「？ 私は星の子、ナガレボシ、願いを叶える者・・・  
私を示す言葉はこれくらいしか無いのだけど。」

私と言う存在を証明できる言葉を他に私は持っていないから。」  
「違う、違うでしょ！ノーノが言いたいのはそうじゃなくて・・・」

（変な人・・・）

少女は思う。

今までナガレボシを手にする人は、それで納得し願いを叶えておしまい。

それなのに、

「そう、名前！名前でし。ノーノはノーノでし。」

あなたのお名前何でしか？」

「・・・な・・・まえ？」

相手は願い事を叶えてくれる存在とだけ認識していれば良い。

人と関わらず、端的に言葉を紡ぎ仕事をしておしまい。

その方が、少女の心も楽な事でした。

それなのに、それなのに、

「そうでし！あなたの名前教えてくだしやい。」

キラキラした、星にも負けない輝きをした瞳に吸い込まれてしまいで  
そうで

少女を見詰める目は、少女のように曇った目では無く真つ直ぐで  
人の心情に敏感な少女は気が付いてしまいました。

ナガレボシでも、願いを叶える存在でもなくノーノは“少女自身”  
に純粹に興味を持っているのだと。

そんな感情を向けられるなど初めてで。

救世主だとか、願いを叶えた事による感謝だとか、ナガレボシのお  
まけだとか・・・

願いを叶える者としてしか、見られる事しか無いというのに



「・・・ソロラ」

思わず名乗ってしまったのは、初めての事でした。

様 03・ 例え、それが絶対に叶うと言う保障は無くても

「ソロラちゃん！綺麗な音が揃ってるでしね。」

「あっ、ありがとう。あの、それより貴方のねが

「ノーノでし」

・・・ノーノの願いは何ですか？」

「願いでしか？特に思いつかないんですけど。」

「え・・・」

やけにあっさりと返すノーノにソロラは目を丸くしてしまいました。  
人は誰しも願いを持つもの。

欲など、無くそうと思っても無くなってはくれないもの。

ナガレボシを手にながら、絶対に叶う約束がされていながら思いつかないなどと言う人をソロラは見たことがありますでした。

「えっと、強くなって王様になりたいとか」

「ノーノは十分強いでしょ？それに王様には興味ないでし。」

「魔法が使えるようになりたいとか」

「魔法でしか？魔法が使えなくても不憫はしてないでしょ。」

「その口調を矯正してみるとか・・・」

「これが無くなったら、ノーノの個性が減るでし。

これはノーノの一部でしから。」

ソロラは頭を抱えます。

今まで沢山の人の願いを見てきました。叶えてきました。

人の願いについて誰よりも知っている筈だし、願いが思いつかないと言うノーのにくらでも提示出来る筈です。

しかし、

（そういえば、今まで私はどんな願いを叶えてきた？）

傷つかないように、関わらないように。

それを繰り返し、必死に目を逸らし続けたソロラの頭には願いが残っていませんでした。

「それじゃあ、誰か助けたい人は居ないんですか？

お友達に困っている人がいるとか。」

「ノーノは自分で力を貸してあげることが出来るでしょ。

友達が困ってるなら、ノーノは他人任せじゃなくて自分の力で助けてあげたいでしょ。」

「・・・じゃあ！

何処かで苦しんでいる子供たちとか、助けを必要としている人たちに救いが訪れるように願ってみてはどうですか？」

「ノーノは見た事も知る事も無い赤の他人をたしゆけたいと思うほど、優しい人じゃないでしょ。」

自分の為も、他人の為も願いが無い。

願いが無いと言うには語弊があります。

ノーノは沢山の夢や願い事がありました。

だけど、それはノーノ自身が自分で叶えたいことでした。

強くなりたいたなら、努力すれば良い。

悲しんでる人が目の前に居たのなら、自身の手で力を貸してあげれば良い。

確かに、友人の中で苦しんでいる人は居る。

でも、彼は自分の力で乗り越えるべきだと思う。

綺麗な宝石だって知らない。

それ以上に大切な物を知っているから。

「何か、何か無いんですか？ 私はノーノの願いを叶えなくちゃいけないんです。」

「じゃあ、ノーノの友達になってくださーい」

「・・・それは、出来ません。」

「どうしてですか？」

「私は願いを叶える事が出来るけれど、それは間接的にです。」

“私自身”が願いを叶える事は出来ません。何かをしてあげる事はできません。

私が誰か、友達になれる人を探し導くことは出来るけれど・・・」

「ノーノはソロラちゃんと友達になりたいんですよ。」

「ノーノが願うのは私自身です。だからこそ無理なんです。」

それに、私は一所に留まる事が出来ません。もう、次に貴方に会う事は出来ないでしょう。」

「うーん。」

「・・・」

纏まる事無く時だけが過ぎていつて

そんな二人を夜空のお星様だけが見ていたのです。

## の 04・私は毎年、七夕のこの日に祈り続けましょう

お星様、お星様

どうか、私の願いを叶えてください。

何度、この言葉を聞いたでしょうか。

何度、願いを叶えてきたのでしょうか・・・

二人は困ってしまいました。

ソロラが提示すればノーノに否定され、ノーノが提示すればソロラに否定されます。

だけれど、何故だかソロラは嬉しく感じてしまいました。

（こんなに長い間会話するなんて、関わるなんて、人と接する事なんて初めて。）

この人は、この目の前に居るソロラよりも身長の小さな精霊は変わっていると思う。

それは、悪い意味ではなく良い意味ではあるが。

本当に友達になりたいと、願ってしまいます。

ノーノとこうして話をしたいと思っています。

ソロラはナガレボシの行く先にしか進めない。

ナガレボシ自体、珍しくめったに手にすることが出来ない貴重な存在。

二回もネガイボシを手にする事が出来る人など居るのでしょうか。珍しいといっても数存在するナガレボシ、そして一人きりのソロラ。そのネガイボシをソロラが見つける事が出来る事が出来るのでしょうか。

そんな確立、どれだけ多く見積もったところで一%よりゼロ%に近い。

ふと、真剣な表情をノーノが見せました。

今まで二人して眉に皺を寄せて悩んでいたと言うのに。

丸い茶色の瞳が綺麗だとソロラは思う。

ソロラには持っていない優しいその色が。

その瞳に映る、冷たい色をしたソロラの色が揺れる。

「自分じゃない、他人の為に願っても良いんでしょね？」

「はい。人の為に何かしたいと言うのも、また一つの願いだから。」

「あなたの願いは何でしたか？」

いつも、いつもソロラが口にする言葉。

それが自分に問われる日が来るだなんて

時が止まった気がした。

キ 05・七夕の日に出会った、初めての友人に捧ぐ

哀しい、辛い、寂しいと瞳が揺れている事なんてすぐに分りました。そして、すでにその事を諦めている事も。

だけどそれでも、心のどこかで諦めきれずに強く思っている事も。

きっと、この能力を持つには彼女は優しすぎたのです。

たった一言、たった数文字。

それを発しただけで青空色の瞳が零れ落ちそうなほど見開かれまして。

名前を聞いた時も、願いが思い付かないと言った時も動揺しているのはすぐに分りました。

ソロラは顔に出やすい。

それを出すまいと必死に眉を寄せている事なんて会ってから時の経っていないノーノでもすぐに分りました。

「……ど……う……して……」

「どうしてって、そうすればソロラさんの願いを叶えてあげる事が出来るでし」

「っ……なん……で？」

私と、さつき会ったばかりなのにそんな事……言えるの？」

「そんなの、知らない赤の他人よりソロラしゃんの願いを叶えられた方が嬉しいでしょ。」

「で・・・も、」

「ノーノはこれでも長い間生きてきたでし、それでもナガレボシなんて見たの初めてでしゅし、

見たことあるなんていう人聞いたことも無いでし。

あなたに、もう会うことが出来ない無いなら。ノーノはソロラしやんにこのネガイボシをあげたいでしょ。」

ソロラの声が掠れていくのが分ります。

それでもノーノは止める気にはなりませんでした。

今まで、こんな事言う人なんて居なかったのでしょう。

ノーノは自分でも変だとは、人とは少し考え方がずれてるのは知っています。

損をすることや理解されない事も、またその逆だって沢山経験してきました。

人と違う。それが何だというのでしょうか。

だからこそ、気付く事ができる事がある。

だからこそ、やれる事がある。

「そんな・・・の、無いです。私に願いなんで。」

「嘘つき！」

しゃびしいって言ってる、辛いつて言ってる、誰かに分ってもらいたいって思ってるでし！！」

「思っても叶えられない。何を願えば良いと言つの？」

私に星の力を無くす様に願うの？ノーノに傍が居れる様に願うの？

そんなの出来ない、叶えられない・・・よ。」

「ノーノはここを捨てられない。大好きなこの場所を家族を友達を。」



ノーノがソロラさんのしゃびしさを埋めてあげる事は出来ないでし。

ソロラちゃんもしゅてられない物がある。それはお互いしゃまでし。

だから、ナガレボシに変わりに叶えて貰うでし。」

ノーノはナガレボシをソロラの目の前に突き出すと一番の笑顔で言いました。

「いつか、ソロラさんの前にじゅっと一緒にいてくれる子が現れましゅように。」

ソロラさんの事を理解して友達になって、大好きになってくれるような子と出会える事が出来ましゅように。」

ナガレボシはふわりとノーノの手から浮き上がり、旋回します。

その願いに答えるようにナガレボシは淡い桃色の光を放って輝くと、ソロラに降り注ぎ消えていきました。

ソロラが何か言葉を発する前に、能力を使う前に全ては終わってしまっていて

叶えたのはソロラではなくノーノとナガレボシ

そう、それは二人分の願い。

「どうして・・・私は、何も・・・」

「気付いて無かったんでしか？こんなにもあなたは星に愛しやれるのに」

いつだって、星はソロラ見守り温かった。

ソロラは星が大好きで、その逆は考えてもみませんでした。生きていないと決め付けて、ずっと思い込んでいました。

星は自分の意思で動き、輝きそして消えていたというのに・・・

「ありがとう、あり・・・がとう、ございます・・・」

ナガレボシの光を浴びた体を抱きしめて、ソロラは涙が止まりませんでした。

どの位経ったでしょう

師匠からこの能力を受け継いで、師匠が亡くなって一人になって、自分の中の時が止まって

誰もがその存在を知らなから、誰も“彼女自身”見てくれる人が居なくなつて

人とは違い長い長い年月を過ごしながら、諦めて諦めて、それでも心のどこかであきらめきれなくて

「この願いが叶った後は、ソロラちゃんが頑張るんですよ。」

だって、ノーノが願ったのは“出会う”と言う事だけでし。

幸せになれるのかは、楽しく生きていく事が出来るのかは、ソロラちゃんとその子の頑張り次第なんですから。

ノーノはきっかけを作っただけだし。ノーノはソロラちゃんの幸せをナガレボシに願った訳では無いんでしから。」

「はい。・・・それでも、ありがとう。」

私の事を考えてくれて。私の事を思ってくれて。私に願いをかけられて。私に光をくれて。」

全てを与えてくれた訳ではない。

むしろ、それがソロラにとっては嬉しかった。

ノーノのそんな考え方が、全てを与えられる以上に自信の事を考えてくれていると伝わって嬉しかった。

悲しさではなく嬉しさで溢れる涙を目に貯めながら、眉を寄せる事無くソロラは穏やかに笑いました。



セ 06・どうか、君が大切な人と幸せになれますように

貴方は一年にたったの一度しか会え無い事を嘆いていますか？

例え、姿が見えなくても、声が聞けなくても、触れることが出来なくても。

それでも、私は思い続けたい。

願いを叶え終った後にこんなにもものんびりしている事など一度もありませんでした。

この辺りで一番背の高い丘の上、沢山の零れ落ちそうな星がよく見える場所。

二人は寝そべって星を眺めています。

「ソロラさんの幸せは、ナガレボシに願うんじゃなく友達として願うでし！」

「友達として・・・？」

「もう、会う事が出来なくなっただって心の持ちようでし。」

それとも、ソロラさんはノーノと友達になるの嫌でしか？」

「ううん。そんな事無いよ。とっても嬉しい。」

「それは良かったでし！」

じゃあ、ソロラちゃんもお星様をお願い事するでしょ」  
「えっ？どうしてナガレボシじゃない星に願い事を？」

「ソロラちゃんもしかして忘れてましゅか？」  
今日は、七夕でしょ。ナガレボシでは無い星と一緒に願うでし！」  
「そう・・・ですね、では私も願います。ノーノの幸せを友達として  
ベガとアルタイルに・・・」

お互いに顔を見合わせ、心の底から笑いました。

二人で見上げた空にはより一層綺麗に輝く満天の星たち。  
織姫と彦星のように、年に一度でさえ会う事は出来はしないけれど  
たった一度しか、もう二度と会えないとしても  
それでも、幸せだと思えました。

七夕の日の君に捧ぐ

君に出会えたこの日を、私はずっと忘れる事は無いでしょう。  
君に教えられた事を、私は胸に進んで行くでしょう。  
君に与えられた物を、私は大切に守り続けて生きていくでしょう。

それは七夕の日に起こったお話。  
お星様から星の子に送られた一つの出会い。  
そして、新たに出会いを願うお星様のキセキ

おしまい！

キ 07・そして私も、幸せに向かって歩いていく事を星に誓います

おまけ

それは、とある世界のとある洋館。  
見るからに幽霊屋敷なその場所は、外見に似合わず沢山の人滞  
在していました。

「おい、何ニヤニヤしてるんだ？お前。」

「わー本当だ。変な顔だね。」

「変。」

「そ、そ、そつ、揃ってそんな事言わなくなつて良いじゃないで  
し  
かー！」

「だつて、なあ？」

「俺にはそう見えたんだから。仕方ないよ。ねえ？」

「うん。私もそう見えた。」

「きいいいいい！酷いでしー！」

「まあまあ、落ち着いてください。一体どうしたんですか？」

「嬉しい事・・・あつた？」

「えへへ、そうなんですよ。嬉しいんです。」

「それは良かったですねえ」

「・・・良かったね」

一番小さな身長の子の手には一冊の絵本。

簡単に書かれたその絵本の内容は短いけれど

ずつとずつと気になっていた友達の事が描かれていて

「よかったでしね・・・」

物語は、どこかの世界で実際に起こったお話。

きっと、この世界ではない所でこの絵本に描かれていた事が本当に起こったのでしょう。

そう思うと、なんだかとても心が温かくなりました。

「今日は七夕でしょー。皆で願い事するでし！」

あなたはその後幸せに過ごしていますか？

遠く離れた地から、友達としてあなたの幸せを願っています。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6104m/>

---

7/7

2010年10月10日02時11分発行